

3・11を風化させない —復興支援継続に向けて—

中学校・高等学校事務長

鎌田 伸一



震災復興ボランティア概要

ボランティア休暇を取得し、12月8日（木）～12日（月）4泊5日の日程で、岩手県の水沢、一関、気仙沼、陸前高田、大船渡、釜石、大槌、吉里吉里、遠野、盛岡を訪問した。

京都始発の新幹線、東京にて東北新幹線に乗り換え、岩手県水沢へ。一関でレンタカーを借り被災地を訪問。

同志社チャリティーコンサートでの寄付金と、自らデザインした「組み木」の販売収益金を、大船渡、陸前高田、釜石の各施設に寄附した。

岩手県水沢市出身でチャリティー実行委員の吉田美樹さんは、震災直後から現



組み木『チャリティーうさぎ』

地に向けて支援物資を送る等の活動がされており、吉田さんを通じて同志社校友会岩手支部の方を紹介頂き被災地訪問の企画を組み立てる事ができた。

被災地訪問記

●2011年12月8日（木）●

【岩手県水沢、一関を訪問】

岩手県水沢江刺駅11時半に着。岩手県訪問は初めてで非常に遠い印象を抱いていたが、昼前に到着。想像よりも遥かに近い事を知る。まずは吉田さんの高校時代の同級生が経営する南部鉄器の工場「及源鑄造」を訪問。震源地からはかなり離れているものの地震で鉄の炉が破損

その後努力の末、営業再開されたそうだが、次に、同志社創設当初、新島襄先生と関係の深かった山崎為徳さんの研究者である高橋光夫先生を訪問。地震により自宅が破損し、数百万円の費用を掛けて改修したとの事。沿岸部からはかなり離れているにも関わらず地震の影響はかなり広範囲に渡っている。

その後、同志社と関係の深い水沢教会を訪問。幼稚園も併設しており園児の安全性確保から、牧師先生が放射能測定をしている場面に遭遇した。風向きにより遥か遠方まで放射性物質が飛来している事実に驚かされた。

その後、岩手県に在住している『組み木創作の会』（木のおもちゃ作家の全国組織）のメンバー3名が合流、この会からも600個を超えるおもちゃを被災地に寄贈した。その日は一関に宿泊。

●2011年12月9日（金）●

【一関から気仙沼へ】

いよいよ被災地へ向けて出発。気仙沼で姉家族が被災した門間さん（おもちゃ作家の仲間）に途中まで先導して頂き、

その後一人東へ車を走らせる。

途中の山越えの道は震災の影響をほとんど感じる事のない、自然豊かでゆつたりとした東北の風景。この程度の事で済んだのなら…と軽い安堵感を持ったのはつかの間、海岸に近付くにつれて、その思いが見事に打ち砕かれていく。

気仙沼市内を流れる大川に沿って海岸方面に向かっていくに従い、津波による大きな傷跡、痕跡が徐々に目に飛び込んでくる。

【気仙沼の惨状】

震災後9ヶ月が経っているにも関わらず、沿岸部では、未だ信号機は復旧しておらず、至る所にパトカーが停車し警察官が手と笛で交通整理。大阪、京都など他府県ナンバーのパトカーがほとんどで、自衛隊だけでなく、警察官、公務員等も沢山支援協力している。沿岸部立入禁止エリアも多くある中、標示されていない所から海岸方面へ近付いてみると凍りつくような情景が目に見え込んできた。

戦場跡地のように建物は全て破壊し尽くされ、まるで「映画のロケ地：？」と、錯覚してしまうような、現実の世界とは

到底思えない光景であった。破損の酷い建物は既に撤去され、基礎だけが残っている場所も多数。何とか形のある建物も残ってはいるものの、中身が波に流されて空っぽであったり、残骸が残されたままの建物も多数見受けられる。建物の足元はもちろん、3階の高さまで潰れており、屋根の上まですっぽりと覆い被さる程の津波がきた事が解る。

復旧に向けての道のりは、まだまだ永く厳しい道であると痛感した。

【南気仙沼小学校】

更に海岸方面に向けて道を進むと、川沿いに建つ小学校が目に見え込んできた。これが小学校かと思う程の、想像を絶する光景である。校庭にはスクラップとなりグチャグチャにつぶれた車が何重にも積み上げられ、廃棄物処理場と化していた。川のすぐ横に位置する南気仙沼小学校は、3階の高さまで完全に水に浸かり建物は全く使い物にならない状況となっている。かつてここで子供たちが笑いながら遊んでいた場所だったとは、どう頑張っても想像する事はできなかった。この場所が何処かを確認する為に『復



「ひかみの園」での糸鋸ワークショップ



10mを越える瓦礫の山(陸前高田)



海の中に沈んだ市営松原球場(陸前高田)



奇跡の一本松(陸前高田)

高田市内に住んでおり、関係者の多数が犠牲となった。

●2011年12月10日(土) ●

【糸鋸ワークショップ】

寄附金をお届けした「ひかみの園」で、翌日糸鋸のワークショップをさせて頂く事になった。施設ラウンジ中央の机を借り、持参した木工機械の糸鋸で組み木のおもちゃを製作。障がいのある方々が私を取り囲み、興味津々、製作工程を食い入るように見ておられた。

最初は見ているだけであったが、一緒につくりたいという方が一人、二人と現れ、一緒に製作を行い、楽しい一時はあつという間に過ぎていった。

【陸前高田の惨状】

午後、陸前高田市内を車で巡り惨状を視察。初めてここに立った瞬間、茫然自失、あまりの衝撃に言葉を失ってしまつた。かつてここが市街地であったことを想像する事は出来なかった。広大な荒野に所々鉄筋コンクリートの塊が残し、まるで爆撃を受けた後の戦場跡地としか思

えなかった。

かつての駅前ロータリーらしき場所に立ったが、駅舎も線路も無く、駅前商店街など見る影も無かった。ただただ殺風景な荒涼とした風景だけが広がっていた。

所々にスクラップ車の山や瓦礫の山がうず高く積まれていた。この辺り一体は1m近くも地盤沈下している為、とりあえず復興に向けて嵩上げされた応急的な道路でさえも、海側は2mほど土囊が積まれていた。

震災直前、高田松原近くに竣工したば

興支援地図」を確認してみると、何と友人の甥が波に吞まれ1ヵ月後に発見された場所が、その直ぐ目の前を流れる川の中であった事を知り愕然とした。偶然にも、その場所に引き寄せられたのであろうか。手を合わせご冥福をお祈りした。

【岩手日報社・田辺崇さんとの出会い】

今回の東北訪問の中で最も印象的な出会いが、岩手日報社の田辺崇さんとの出会いである。初めての被災地訪問をどのように計画立ててよいのやら途方に暮れていた時、田辺さんと知り合い、今回の

被災地訪問の骨格を固める事ができた。

田辺さんは、私と同じ同志社大学経済学部出身。川越修先生のゼミ生で、校友会岩手県支部に所属する大変優秀なナイスガイである。

自身も大船渡在住で、下宿の家財道具だけでなく、購入したばかりの新車もローンだけ残してすべて流されたという被災者の一人だ。

震災時、大船渡の社屋におられ、津波から避難しつつも撮影した写真が『平成の三陸大津波』にも掲載され、2011

年度の日本新聞協会賞も受賞された。

【大洋会「慈愛福祉学園」への寄贈】

大船渡市にある社会福祉法人 大洋会「慈愛福祉学園」は、知的障がい者施設で、関連のグループホームが流されたという事で寄附金をお届けした。

【陸前高田「ひかみの園」への寄贈】

陸前高田にある社会福祉法人 愛育会「ひかみの園」主要施設は高台に在り直接の被災からは逃れたが、グループホーム6ヶ所が流されたり、ここで暮らす障がい者の方々・職員の家族の多くが陸前



陸上に打ち上げられた大型船(気仙沼)



今でも放置されている被災住宅(気仙沼)



スクラップ置き場と化した南気仙沼小学校の校庭(気仙沼)



田辺崇さんが命懸けで撮影した大船渡の街(大船渡)



奇跡の一本松キーホルダー



大日如来像



炎上した気仙小学校の体育館(陸前高田)



3階まで水没した陸前高田高校(陸前高田)



かつての新日鉄釜石ラグビー部グラウンド(釜石)

た。子どもたちは目の前でその悲惨な光景を目撃したそうである。

山の上からは気仙小学校が3階まで水に浸かり、流れてきたプロパンガスのボンベが爆発し体育館が炎上する状況を目撃。もし山に燃え移ったら、避難しているその山も火事になり全員焼死するかも知れないとの恐怖と闘いながら、一睡も出来ず一晩を明かした。幸いにも山には燃え広がらず難を逃れた。

木村さんも奥様も、お互いもう無理だろうとあきらめていたが、僅かな望みに

懸けて山中を探し廻ったところ、別の場所に居た奥様とようやく再会！二人無事を祝って涙したそうである。

●2012年12月11日(日) ●

【陸前高田気仙町】

2泊目、3泊目は被災地から車で1時間余の遠野に宿泊。津波の被害を受けなかった為、被災地への前線基地として重要な拠点となった場所である。

この日は、陸前高田気仙町の復興支援により建てられた小さな図書館『にじの

ライブラリー』の一角を借り糸鋸で組み木のおもちゃを製作、たまたま訪れたご家族と話をしたところ、ご主人は被災した陸前高田高校の理科の先生とのこと。

その後訪れた陸前高田高校もとてもない惨状であった。海岸からは遠く、すぐ裏に山を配した場所に立地していたにも関わらず、3階までが完全に水没。割れた窓ガラスから破れたカーテンがヒラヒラしていた光景が今でも鮮明に焼き付いている。

【陸前高田竹駒地区】

【御菓子司「木村屋」 木村昌之さん】

同志社大学商学部出身 陸前高田で御菓子屋「木村屋」を経営していた木村昌之さん

また、京都伝統工芸大学校は、陸前高田の流された松を使い、大日如来像(高さ2・7m、幅1・8m)に再生し、清水寺に安置する事となった。

【御菓子司「木村屋」 木村昌之さん】

同志社大学商学部出身 陸前高田で御菓子屋「木村屋」を経営していた木村昌之さん

3・11の震災時、木村さんの奥様は海岸近くのお店に居た。実は、大震災の前日にも地震があり、津波警報が鳴り50cmほどの津波が来た。今回の地震もそれ程大きな津波は来ないと判断し、逃げ遅れた人が多く居たらしい。しかし、奥様は、①この地震は普通の地震でないと察知して逃げる事を決意。②最初車で逃げたが信号が壊れ道路が渋滞し車が完全停止、車を乗り捨てて逃げる事を決意。③山の

最初、山の麓に在る気仙小学校が避難施設であった。しかし、何度も押し寄せる津波により水嵩がドンドン上昇し、このままでは避難所も危ないと判断し、山の上に駆け上がり逃げる事になった。子どもたちはいつもここで山登りをして遊んでいたので無事逃げる事が出来たが、おじいさんやおばあさんは、その山の坂を登る事が出来ず、子どもたちが逃げる直ぐ後ろで、波に引きずり込まれていっ

かりの「市営松原球場」のグラウンドは海の中に沈み、観客席とライトの鉄塔だけが海の中に立つ異様な光景であった。

【高田松原 奇跡の一本松】

かつて美しい景勝地として観光客も多数訪れた高田松原、7万本の松林はあつという間に押し流され、ただ一本だけ残ったのが「奇跡の一本松」である。夕方ここを訪問した時、多くの見学者があつた。津波にも負けず、唯一頑張つたこの松は、多くの被災者に勇気と希望を与える事となった。しかし、土地が沈下し、根が塩水に浸かった状態であるが故に、生存できないようで、非常に残念である。

しかし、地元の材木屋の村上富夫さんは、この流された松を利用してキーホルダーを製作し、震災を忘れない、風化させない取り組みを行っている。

之さんから震災当日の様子を伺ったので紹介する。

陸前高田市内を流れる一級河川の気仙川には、海側から気仙大橋、姉歯橋が掛かつていたが、今回の震災と津波により2本とも流された。木村さんの自宅、店、工場は姉歯橋のすぐ近く、もう一軒のお店は高田松原の近くに在った。今回の津波により、木村さんの自宅、店2軒、工場、車など、財産全てが流された。

木村さんの住んでいた600軒程の集落もほぼ壊滅。しかし、これ程までに大規模な被害を受けたにも関わらず、木村さん家族には誰一人犠牲者が出なかった。

方へ向かつて2キロ程走って逃げたが、山の手前の橋で「橋は危険な状態なので通行禁止」という事で静止させられた。しかし、それを振り切つて山の方へ向かつて逃げた。通過したすぐ後に橋は流されたそうである。

的確な判断、決断、勇気により生還する事ができた。

一方木村さんは、震災時自宅に隣接するお店に居た。木村さんもこの地震は普通ではないと判断し、奥様を助けるべく海岸方面へ向かうとした。しかし、道路は塞がり車も全く動かず、間に合わない判断し、他の家族を連れて山の方へと逃げた。

気仙川の上流、すぐ近くまで津波が襲ってきたものの、ぎりぎり難を免れた地元公民館が竹駒地区コミュニティセンターとして復興の拠点となっていた。一関から訪問したボランティアの方が、子ども向けののお芝居を演じ、大いに盛り上がった。ここに居た陸前高田市社会福祉協議会の生活支援相談員・田浦直樹さんと出会い、話をした。田浦さんは三重県の役所に勤めていたが、震災ボランティアに來た後、仕事を辞めて活動を続けていたところを、社会福祉協議会よりスカウトされ、生活指導相談員となり支援を継続されている。大学卒業後、京都を訪問し和菓子屋『俵屋吉富』でアルバイトをしていた経験もあるそうで、被災地で美味しい和菓子を味わってもらおうと、京都から取り寄せて被災者に食べて頂いたという事であった。

【同志社校友会岩手支部の皆様】

岩手日報社の田辺さんの呼び掛けにより、盛岡市内で同志社校友会岩手支部の皆様が集い交流の機会を持って頂いた。支部長の佐々木さん、野場さん、伊藤さん、池野さん、大久保さん、初めての出

会であつたにも関わらず、古くからの知り合いであるかのごとく、すぐに心打解ける事ができた。同志社という絆が、我々の心を結び付けてくれたのである。

●2011年12月12日(月)●

【釜石訪問】

4泊目は盛岡市内に宿泊。訪問最終日の早朝5:30、もう一度沿岸部まで車を走らせ、釜石、大槌、吉里吉里、などを訪問。

同志社大学法学部卒で、地元釜石市役所に勤務している笹村聡一さんが釜石を案内してくださり、釜石保育園と障がい者親の会「おひさまの会」に寄附金を届けた。

沿岸部に建つ釜石保育園は園舎がすっぽり水に浸かったが、避難警報にいち早く従い園児全員を無事に山の上まで避難誘導させる事ができ園児の犠牲者は出なかったものの、園児の家族等が多数犠牲になったそうである。屋根まで水没した園舎は利用できず、上流で被災していない施設を借りて保育園を再開していた。かつて同志社大学ラグビー部と死闘を

演じた新日鉄釜石ラグビー部のグラウンドは、仮設の避難住宅で埋め尽くされていた。

【大槌、吉里吉里】

釜石にて寄附金を手渡した後、大槌、吉里吉里にまで足を延ばし、被災地を視察した。こちらの地域も津波の猛威により街が壊滅、元の市街地は津波に吞まれ建物はほとんど無くなり、荒涼とした平坦地になっていた。元々山の高台に位置し、津波の届かなかった墓場だけが目立ち、印象深く記憶に残っている。

復興に向けての永い道のり

新聞には、その日の震災による犠牲者の数と行方不明者の数が掲載されている。犠牲者の数は今も日々増え続けている。幸いにも命が繋がった方々の数は掲載されていない。しかし、私が東北で出会った全ての方が被災者であった。福島原発事故による放射性物質の飛来による被災を含めると、数十万、数百万人が被災しているといえる。

しかし、岩手で出会ったほとんどの方

は想像していたより元気だという印象であった。被災地で私が出会った全員の共通点は、自らが被災者であるにも関わらず、震災復興に向けて皆さんボランティアをされていた事だ。寄附金の送り先を選定していただき、多くの出会いの機会を設定し、また現地を案内してくださった田辺さん。自宅、店、工場、車、財産

全てを失った木村さんは、私が滞在している間中、被災地を訪問した方々の案内などをし、走り回っておられた。釜石の笹村さんは、私が訪問する日、仕事を休んで寄附先に同行。これ程多くの犠牲があつた中、生かされた事への喜びと感謝を、今度は自分達がボランティアする事で返していこうとするボランティアスピリッツ。

家を失う、財産を失う、家族や友人を失う、食べる物さえ無い、電気も水道もガスも止まり、トイレさえも使えないような極限の状態からの脱出。それ以上無いような酷い状態を乗り越えてきた自信と勇氣。日本だけでなく、世界中からの支援に対する感謝。

人と人との素晴らしい出会いや絆が沢

山有り、次に向けての希望が少しずつ見えてきつつある。しかし、復興までにはまだまだ永い年月が必要であり、数年ではなく、数十年のスパンで復興支援を継続していく必要がある。震災から1年が経過し、今ようやく復興に向けてのスタートラインに立ったところである。

福島

原発から30キロの少し外側、福島県いわき市に、木のおもちゃ作家仲間が住んでいる。30キロ圏内は危険でその外側は安全であるというナンセンスな話を誰も信じていない。被災者に対するしつかりとした補償をすべきであり安全でない事は訴えていかねばならない。一方風評被害が先行して、事実ではない情報が流れたり、それを信じる事があつてもいけない。どちらの立場に立つても大変悩ましい状態である。マスコミこそがしっかりと事実のみの的確に発信していく事が必要で、個々においては真実の情報のみを見極め、選別し、判断する力が必要である。与えられた情報をそのまま鵜呑みに

するのではなく、自ら考え、想像し、発想し、的確に判断する力と勇氣と行動力が必要である。これは日々の教育実践の中で養われる力である。

福島原発事故の影響を強く受けている地域では、スタートラインにすら立っていない状態である。地震と津波は天災であるが、原発事故は人災である。人災は防げるはずのものであるが故に、原発による被災は怒りを何処にぶつけて良いのか解らず許す事が出来ない。原発造る時、「絶対に安全です！」という言葉が使われる。安全な原発なんて絶対に無い事を、多くの犠牲を払った福島が証明をした。我々はその事実を重く受け止めるべきである。

日本で最も原発が集中している地域が福島県であり、もしここで事故が起こった時には、福島だけでなく、滋賀、京都、大阪を含めたエリアまでもが被災する。同じ過ちを繰り返さない為にも、原発を停止し、自然エネルギーへの転換に向けて行動していかなければならない。子どもたちの未来の為に！未来の子どものために！